



平成28年度水稻生育診断予測事業速報No. 2

(早植栽培6月8日調査結果)

平成28年6月10日

栃木県農政部経営技術課

 **茎数は平年よりやや少ない。目標茎数が確保でき次第速やかに間断かん水を開始する。**

 **イネ縞葉枯病の防除を徹底する。いもち病の発生に注意する。**

1 気象概況<<5月下旬～6月5日(宇都宮)>>

5月下旬～6月第1半旬までの平均気温は平年より0.7～3.7℃高く、日照時間は5月第5半旬は平年比72%と寡照となったものの、期間内では140%と全般に高温・多照傾向で経過した。降水量は5月第5半旬、6月第1半旬は降雨がなく、期間内も平年比12%と少ない状況であった。

梅雨入りは、昨年よりも2日遅く、平年より3日早い6月5日であった。

2 調査結果<<早植栽培、品種：コシヒカリ>>

(1) 16か所平均(表1)

草丈はやや長く(平年比104%)、茎数はやや少なく(97%)、葉齢は0.3葉多く、葉色は0.3淡い。葉齢から判断して、生育は2日程度進んでいると考えられる。生育診断値(葉色×茎数)は平年比90%と小さい。

(2) 分施体系の生育(10か所)(表1、図1～2)

ア 草丈は35.5cmで平年比105%とやや高く、茎数は372本/m²で平年比95%とやや少ない。

イ 葉齢は8.2葉で平年より0.3葉多く、葉齢から判断すると、生育は平年より2日程度進んでいる。葉色は4.4で平年よりやや淡い。

ウ 生育診断値(葉色×茎数)は1,676で平年比88%と小さい。

エ イネミズゾウムシの発生は2か所、イネドロオイムシは1か所で確認されているが全般に発生程度は低い。なお、イネヒメハモグリバエの発生は確認されていない。

(3) 全量基肥体系の生育(6か所)(表1、図1～2)

ア 草丈は34.0cmで平年比102%とやや長く、茎数は348本/m²で平年比102%とやや多い。

イ 葉齢は7.9で平年より0.1葉多く、葉齢から判断すると、生育は平年並である。葉色は4.2で平年よりやや淡い。

ウ 生育診断値（葉色×莖数）は1,455で平年比95%とやや小さい。

エ イネミズゾウムシの発生は4か所、イネドロオイムシは3か所で確認されている。無防除地区で発生が多い傾向にあるが、全般に発生程度は低い。イネハモグリバエの発生は確認されていない。

(4) 地温の変化【農試調査】（図3-1～2）

前回調査（5月25日）以降、平均気温が平年を下回る日が数日あり、地温も同等の傾向にあった。

3 技術対策

気象庁地球環境・海洋部発表（平成28年6月9日）の「関東甲信地方 1か月予報」（6月11日から7月10日までの天候見通し）では、“平年と同様に曇りや雨の日が多い。”と予想されている。また、平成28年5月12日発表の「エルニーニョ監視速報（No. 284）」では、“2014年に発生したエルニーニョ現象は弱まりつつある。エルニーニョ現象は春の間に終息するとみられ、夏にはラニーニャ現象が発生する可能性が高い”と予想されている。一般的に、夏にラニーニャ現象が発生すると、日本付近では太平洋高気圧の張り出しが強くなり、気温が高くなる傾向があるとされている。

天候不順にも対応できるよう、以下の点に注意して栽培管理を行う。

(1) 水管理

すでに必要莖数が確保されているほ場では、間断かん水を開始し、過剰分げつにならないよう留意する。莖数が確保されていないほ場では、引き続き、夜間かん水、日中止水（浅水）とし、分げつ発生を促進する。

過繁茂になると籾数過剰、登熟低下、白未熟粒の発生、食味低下を招きやすい。また、分げつが多く莖が細くなると、倒伏を助長するため、必要莖数が確保できしだい、速やかに間断かん水に移行することが重要である。

(2) 加里の追肥

加里は、デンプンの生成、同化産物の移行、根の活性化に重要な働きをする。

窒素の吸収が多いと拮抗作用で加里の吸収は抑制されるため、追肥により積極的に加里濃度を高める必要がある。特に、分げつ盛期以降は加里濃度が低くなるので、出穂前40～45日頃に積極的に加里（成分で4～5 kg/10a）を追肥する。

(3) 病害虫の防除

ア イネ縞葉枯病

農業環境指導センター発表（平成28年5月27日）の「植物防疫ニュース（速報No.

2)」及び6月1日付けで発令された「平成28年度 病虫害発生予察注意報第1号（イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ媒介）」）によると、県中南部の保毒虫率は高い状況が続いており、冬期から続く高温によりヒメトビウンカ成虫数も多く齢期も進んでいることから、水田への飛び込み時期は早まると予想され、防除時期も例年より早める必要がある。当該地域では、イネ縞葉枯ウイルスを媒介するヒメトビウンカに対して有効な剤を使用して、地域ぐるみで防除（箱施用剤の使用+本田での薬剤散布）を実施する。

イ いもち病（葉いもち）

農業環境指導センター発表（平成28年5月20日）の「平成28年度 病虫害発生予報第2号」によると、葉いもちの発生予想は「少」であるが、BLASTAM (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/file/data/Blastam/2016.htm>) による葉いもち感染好適条件判定結果では、6月に入って準感染好適条件が出現し始めている。常発地域、箱施用剤を使用していない地域では、ほ場を良く見回り、早期発見・早期防除に努める。なお、いもち病の防除は、発生前の予防剤（粒剤）施用が効果的である。また、いもち病の発生源となる取置き苗は早急に処分する。

ウ ニカメイガ

本年は一部地域で発生が多く、発生も平年よりやや早まっている。箱施用剤を使用していない場合は、被害が出る可能性が高くなるので注意する。

※ 薬剤（登録農薬）はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>)



気象災害による農業被害を未然に防ぐため、
技術対策情報が携帯電話等に直接メール配信される
「とちぎ農業防災メール」のご登録をお願いします！

併せて、気象警報・注意報等が直接メール配信される
「栃木県防災メール」のご登録をお願いします！



↑「とちぎ農業防災メール」
登録はコチラから



↑「栃木県防災メール」
仮登録はコチラから

～栃木県からのお知らせです～

6月～8月は、「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。



- ・安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- ・いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！
- ・農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！